令和５年度　茨城大学教育学部附属中学校　学校評価について

【ねらい】

本校は、国立大学法人茨城大学教育学部の附属学校である。その使命を踏まえ、令和５年度は次のような目標の下に、学校経営、教育活動を行ってきた。本学校評価は、学校評議員と学校関係者評価委員とともに、これらの目標がどの程度実現されているか、実現できなかったことはどのようなことか、今後実現するために何をすることが有効と考えられるかについて検討するために行う。

１　組織目標

○　研究推進・普及、教員養成、人材育成で、附属学校として、茨城の教育を支える。
○　目標をもち、考え学び続ける生徒の育成を推進する。（自主・自律）
○　よりよい人間関係を築き、他者とともに成長する環境づくりを推進する。（協調）

２　学校教育目標

令和５年度茨城大学教育学部附属中学校グランドデザイン

Ⓟめざす生徒像
より高い価値をめざし
たくましく実践し
ともに向上する生徒

Ⓟめざす学校像
優れた教員の養成を行う学校
茨城大学教育学部及び附属学校園と連携できる学校
教員の資質・能力の向上が図れる学校
教育ニーズに対応した学習環境が整った学校
快適な職場環境づくりがなされている学校

Ⓟめざす教師像
教職に対する
高い使命感をもち
信頼される力量ある教師

Ⓟ 学校教育目標　自主・自律・協調

Ⓟ 重点目標

○茨城大学教育学部及び他附属学校園、県教委等と連携を図り、地域の教育課題に対応した先進的な研究に努める。
○教員の資質・能力の向上を図り、地域の教育力向上に貢献できるよう公開授業研究会を実施し、研究成果の発信に努める。
○教育実習及び教職大学院実習を充実させ、将来の教育を担う人材育成に努める。
○生徒が多様な他者とともに成長する学習環境を整備し、考え学び続ける生徒の育成に努める。
○校内研修・校外研修を効果的に活用し、変形労働時間制の利点を生かした自己研鑽を進め、自ら学び続ける教員の育成に努める。

３　評価の項目・内容

1　学校教育目標及び重点目標	5　「自主の名門」を意識した生徒の自主的・自治的な活動の推進
2　学びの価値を実感する授業の実践	6　地球規模で思慮深く考える「グローバル市民科」の改善・充実
3　自ら成長する教員の育成	7　道徳性を高める心の教育の推進
4　困難に負けないしなやかな心を育む学校行事の充実（レジリエンスの向上）	

４　評価者及び評価の流れ

○　本校教員による自己評価を行う。
○　保護者対象による調査を行う。
○　学校評議員会及び学校関係者評価委員会にて説明し、評価を受ける。
○　明らかになった課題点について、次年度に向けて改善策を検討する。

令和５年度　学校評価資料

1　学校教育目標及び組織目標

評価

【重点目標における本校の実践】

〈地域の教育課題に対応した先進的な研究の推進〉

研究推進委員会…週１回、全体研修・研究部員会…必要に応じて開催

○　茨城大学教員との共同研究の推進

・大学教員、教職大学院生との共同研究授業、大学教員の研究テーマと連動した授業の実践

○　研究成果の発信

・本校及び教員個々の研究成果を広く発信し、本校の存在意義を示すとともに、教育の向上に貢献できるよう努めている。具体的には、本校の研究（個人研究も含む）を、本校研究紀要及び論文で発信したり、研修会等で発表したりしている。
県教育研究会論文３本（優良賞、佳作）、教育弘済会研究論文１本、出前授業（国語：かすみがうら市）、理科研究論文等。

〈地域の教育力向上に資する公開研究会及び成果の発信〉

○　学校研究・授業研究会

「学びの価値を実感する生徒の育成」をめざす研究の２年次に取り組んだ。

・授業研究会　→今年度は対面式で授業を公開した。
期　　日：令和５年６月29日(木)、30日(金)
約400名の参加者が参集し、本校の授業を基に、授業力向上を目指した協議が図られた。

○　教育課程全体を通じた道徳教育の充実

・水戸市総合教育研究所の２年次教員の道徳研修の場として、各学年１名が道徳の授業を実践し、範を示した。昨年度に引き続き、２度目になる本年度は、昨年度より充実した授業の展開を目指し、教員相互の研鑽の場として十分に練り上げ「特別の教科　道徳」の授業を実践した。

〈将来を担う人材の育成（教育実習・教職大学院実習〉

○　基本教育実習（教育学部３年次）

・７月にガイダンスを行い、８月後半から10月にかけて、Ⅰ期、Ⅱ期の実習指導を行った。

○　教職大学院課題発見実習・教科領域実習

・５月に４日間、教職大学院生の課題発見実習を実施した。院生のステージに合わせ、省察する視点を、各担当教員が指導・助言した。

・６月から10月にかけて、教科領域実習を実施した。

○　学校インターンシップによる教務・生徒支援及び部活動支援

・教務支援、生徒支援及び部活動支援を行う学部生（１～４年次）が年間を通し活動した。
学校運営上の様々な職務を担当することで、教員としての視野や資質・能力の幅を広げるとともに、異なる学年との交流の場として機能した。

〈多様な他者とともに成長する環境を整備及び学び考え続ける生徒の育成〉

○　全教室における電子黒板の配置

・生徒が学習活動を行うすべての教室において、電子黒板を配置した。タブレットを用いた学習とともに、教員の授業力の改善、向上に寄与した。

○　附中スクールボランティア及び学生インターンシップの協働による環境整備

・ラーニングコモンズを、附中スクールボランティア及び学校インターンシップとともに整備し図書の登録、配架、環境の整備を実現した。また、平素の授業、グローバル市民科及びスクールボランティアとの連携授業等で機能を発揮した。

○　総合的な学習の時間「グローバル市民科」の充実

・講座選択制を導入し、生徒の興味・関心を基にした選択講座が実現した。学年のみで完結せず、他学年との交流の機会を設定し、学びの幅を広げる展開が図られた。

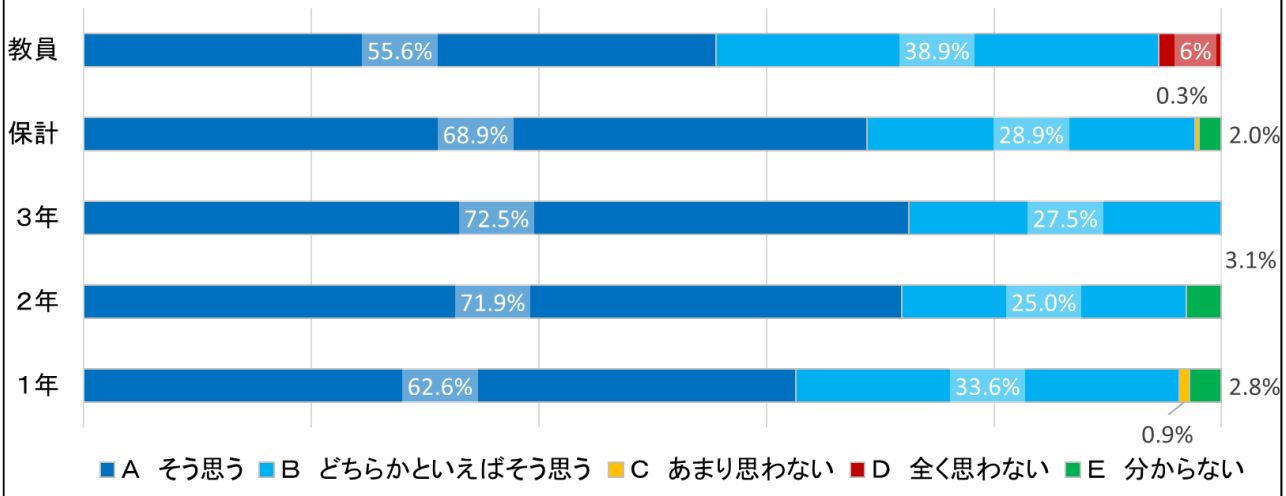
〈自ら学び続ける教員の育成〉

○　教員の主体的な意欲に基づく研修の機会の充実

・本県以外の研究校に赴き、教員自ら資質・能力の向上を求める研修の機会の充実が図られた。

・「特別の教科　道徳」において、公開授業に向けた研修の充実が図られた。各学年による指導案の共同考案、プレ授業を２回実施し、学習効果の検証などを行うことを通して、道徳授業における各教員の資質・能力の向上を図るとともに、地域の若手教員の範となる授業を示すことを目指した。

【学校教育目標及び組織目標】
学校は、学校の教育目標や組織目標の実現に向けて、適切に学校経営を進めている。



【次年度に向けて】

- □ 授業時数と日課、年間指導計画等を見直し、教員、生徒がゆとりをもって学習や研究に臨める教育課程を実現する。
- □ 新年度の新たな研究に向けて、今年度までの成果と課題を整理するとともに、先進的な研究に努めていく。
- □ 各教科・領域等の授業改善を通して、更なる学校教育目標の実現をめざす。
- □ 人的・物的リソースを有効に活用し、教育活動の質の向上を図る(附中ＳＶ)。
- □ 大学カリキュラムセンターとの連携をとおして、学校運営及び経営の質の向上を図る。

【学校評議員及び関係者評価委員より】

- ○ 大学やスクールボランティアの方々等と連携し、すばらしい実践を重ねていることがよく分かった。
- ○ 生徒たちの生き生きとした表情が、資料の写真に表れていて、参考になった。

2　学びの価値を実感する授業の実践

評価

【主な実践】

○　学校研究・授業研究会

「学びの価値を実感する生徒の育成」をめざす研究の２年次に取り組んだ。

・授業研究会　→今年度は対面式で授業を公開した。

期　　日　：令和５年６月29日(木)、30日(金)

約400名の参加者が参集し、本校の授業を基に授業力向上を目指した協議が図られた。

「学びの価値を実感する生徒」の姿を、各教科等において具体的に提案した。授業の展開を通して、目指す姿が表出する手立てを講じ、それらの手立てについて広く協議することを目指した。

○　平素の授業における様々な機関、人材との交流を目指した授業の実践

・附中スクールボランティアとの連携授業（２学年国語：「新聞記事を書く」における『編集長』の立場となったボランティア活動者との対話を通した授業）が展開された。

・社会、技術分野における、教育課程実践研究協力校としての公開授業

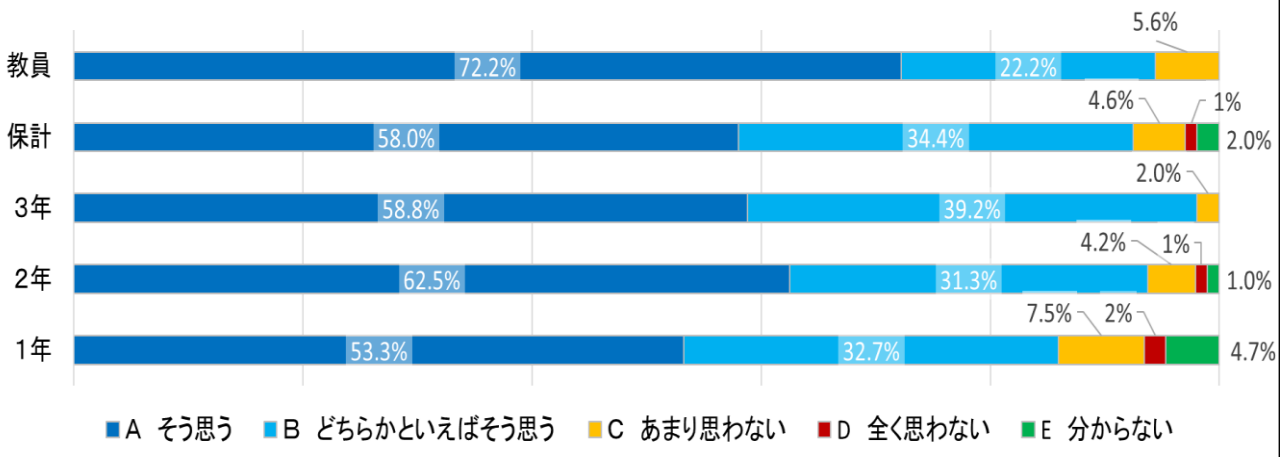
社会及び技術分野において、教育課程実践研究協力校として指名を受け、教科調査官をお招きして提案授業を公開した。社会では、県教育研究会との連携を通して、40名以上の参観者が来校した。技術分野では、研究協力員の教員が多数参観した。

○　茨城大学教員との共同研究の推進

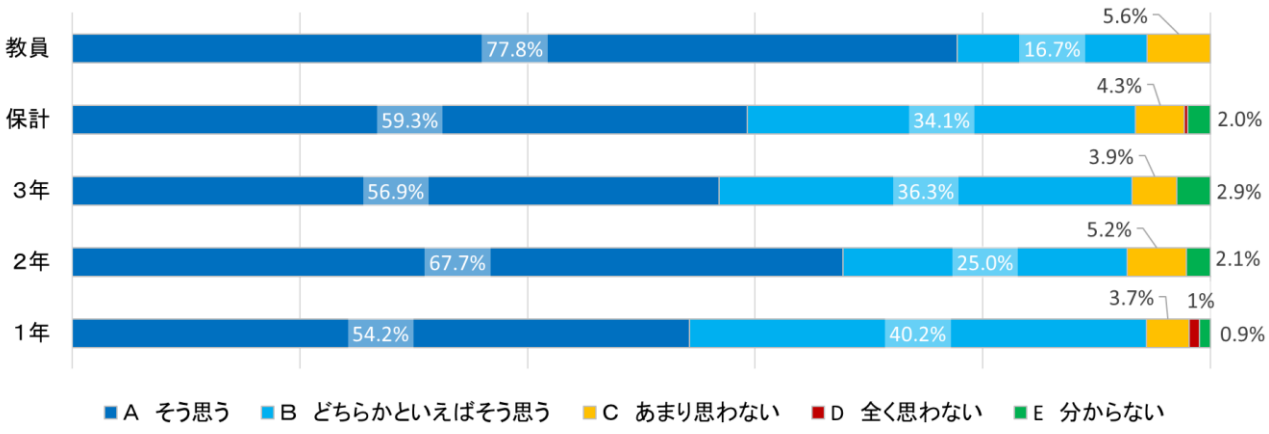
・大学教員、教職大学院生との共同研究授業を進めたり、大学教員の研究テーマと連動して授業実践を行ったりした。

【学びの価値を実感する授業の実践①】

学校は、タブレットやアプリ等を効果的に活用したり、対面授業とオンライン授業のハイブリッド型の対応を充実させたりするなど、ICT機器の整備と活用を推進している。



【学びの価値を実感する授業の実践②】
学校は、大学附属学校の強みを生かし、大学の教員、学生と連携したり、各研究機関や行政機関と連携したりしながら、生徒の主体的な学びを生み出す授業実践を推進している。



【次年度に向けて】

- □ 研究２年次を終えて、有効であった手立てを整理する。
- □ 授業研究や校内研修について年間計画を明らかにし、方向性を明確にして実質的な教育研究を推進する。
- □ 魅力的な教材や単元の開発及び日常生活や社会生活とリンクした単元開発に努める。
- □ 「社会との連携・協働」の実現を目指し、地域との連携、学部人材の活用を推進する。
- □ 自主的な活動の承認と推進を図る。

【学校評議員及び関係者評価委員より】

- ○ 学びの価値を実感する姿とはどのようなものか、参観の学生や保護者にも分かりやすく示してほしい。

3　自ら成長する教員の育成

評価

【主な実践】

○　品位ある生活態度と実践(適切な言語環境の構築、傾聴姿勢の確立)

・「特別の教科　道徳」の授業研修において、豊かに道徳的価値を育む学級経営意欲の向上を図るとともに、生徒の呼称、性差への理解を図り、生徒一人一人を大切にする資質・能力の涵養を目指した。

○　自主的・自律的学級経営の充実

・「学級運営委員会」を基盤としたリーダー、サブリーダーの育成

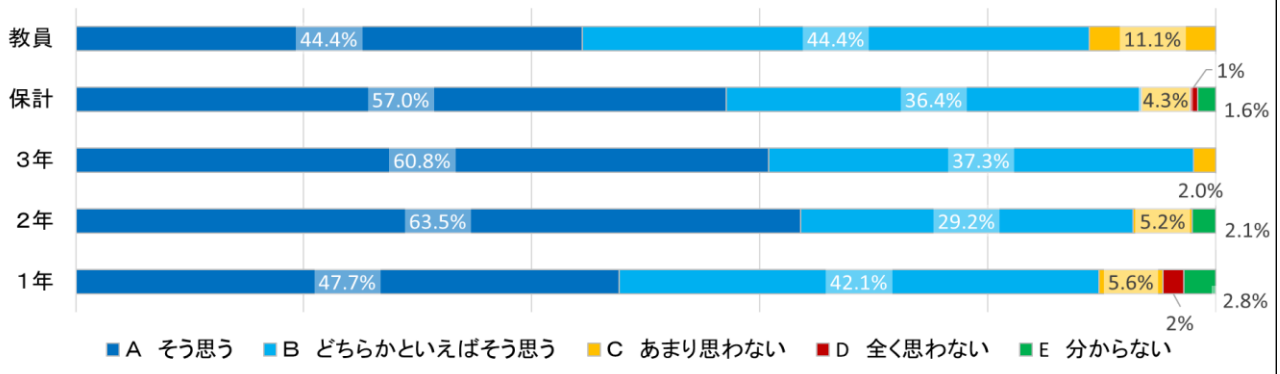
・「きずなアンケート」を通した生徒の悩みやつまずきの把握

○　二者及び三者面談、教育相談を通したきめ細やかな指導の充実

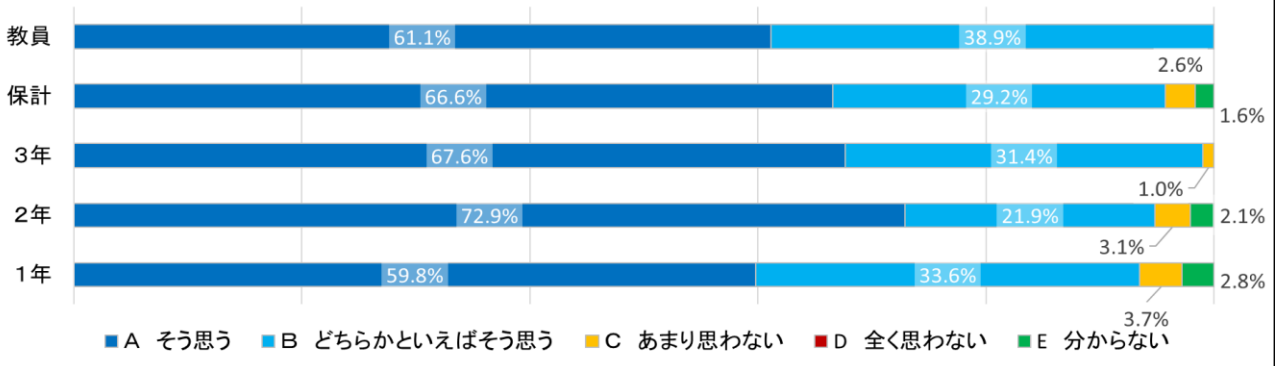
・年度内４回の二者・三者面談を通した思いや願いへの対応

・支援が必要な生徒に対するチームでの対応、コーディネーション力の向上

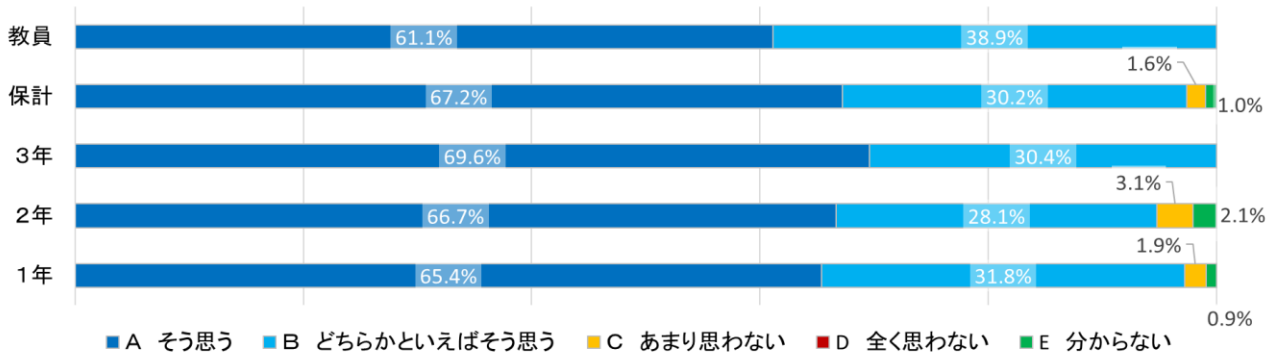
【自ら成長する教員の育成①】
本校の教員は、生徒の品位ある生活態度を育むために、適切な言葉遣いがなされる環境を構築するとともに、傾聴する姿勢が確立されている。



【自ら成長する教員の育成②】
本校の教員は、生徒が目標をもち、目標を実現するために適切に支援するとともに、温かみのある学級や学年の集団を築こうとしている。



【自ら成長する教員の育成③】
本校の教員は、個別面談や御家庭との面談を適切に実施し、生徒や御家庭の相談に寄り添い、支援している。



【次年度に向けて】

□ 教員の言葉遣い、生徒との関わり方にやや課題がある。コンプライアンス研修や平素の声掛けにより改善を目指す。

□ アンケートから、十分に機能していることを鑑み、面談の回数や在り方の見直しを図る。

4 困難に負けないしなやかな心を育む学校行事の充実（レジリエンスの向上）

評価

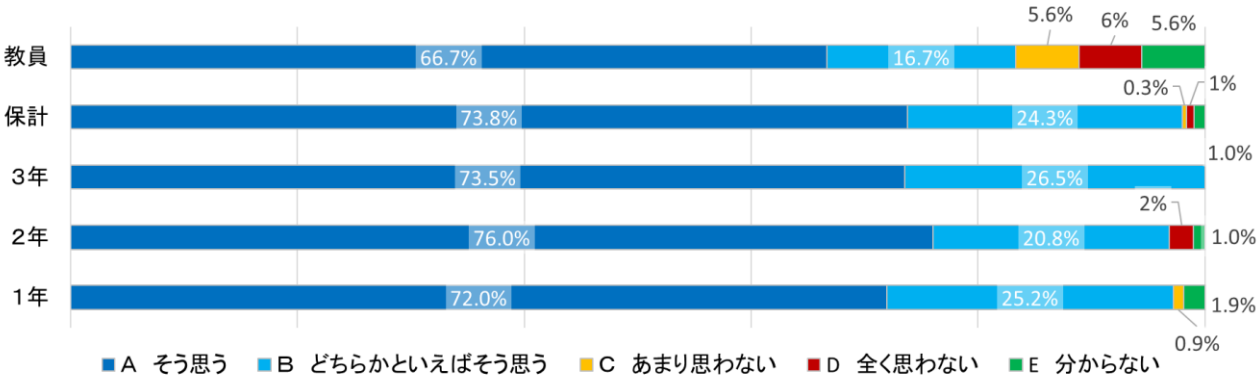
【主な実践】

○ 生徒が互いに励まし合い、支え合う「宿泊共同学習」の充実
- 教員の下見において、トレッキングコースや登山コースの十分な把握
- 附中スクールボランティアへの働きかけによる医療ボランティアの配置
- あえて困難を乗り越える体験を通したレジリエンスの向上
- 伝統の「飯盒炊爨」を通した生徒相互の協力及び絆を育む体験の充実

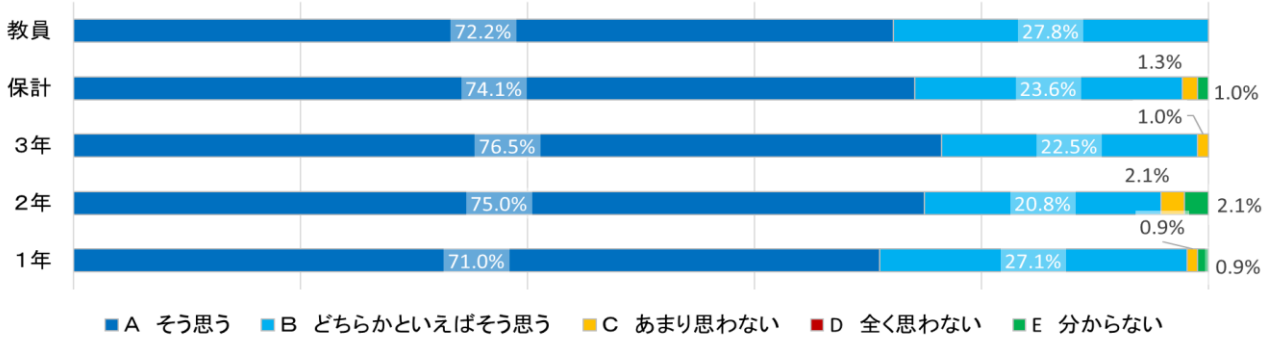
○ 生徒が主体的に運営し、様々な課題を乗り越える学校行事である「いばら祭」、「音楽コンクール」の充実
- 学びの成果を表現するクラスブースの自治的運営
- 生徒の豊かな個性を共有する有志発表
- 前夜祭、後夜祭を設定し、生徒の一体感を演出するマネジメント
- コロナ禍を乗り越えて実現する合唱の実施
- 保護者を招いての合唱披露及びゲストによる演奏などの演出の充実

○ 個人及び集団における関係づくりのＰＤＣＡサイクルの確立
- 月曜日６校時に位置付ける活動「関係づくり」、「集団づくり」、「学級づくり」、「自分づくり」の時間を大切にし、学級及び生徒自身を支援する教員の育成に務めた。
- グループワークの実践（全10時間）
  茨城大学、正保晴彦教授と連携し、生徒相互の信頼関係の構築を図った。
- 「学級運営委員会」を実施し、学級のリーダーの資質・能力を高め、生徒自らが自治的に学級を運営する意識及び資質・能力の向上を目指した。

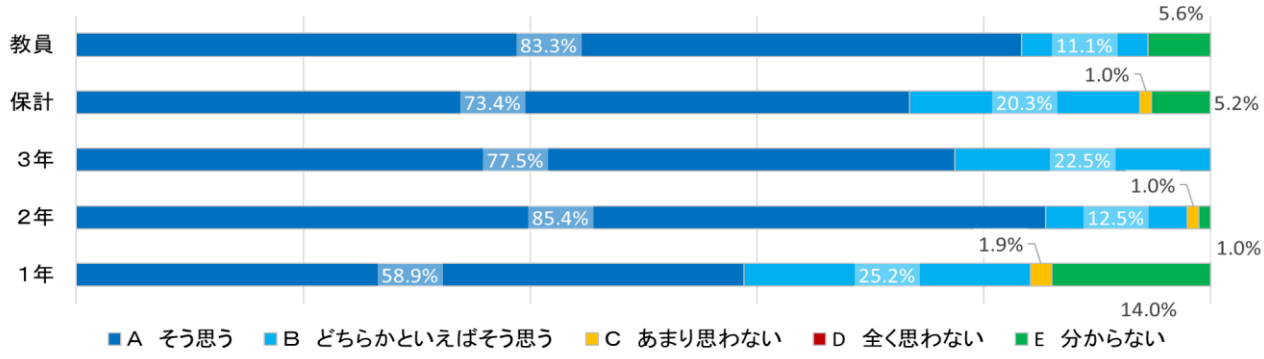
【困難に負けないしなやかな心を育む学校行事の充実(レジリエンスの向上)①】
学校は、宿泊共同学習において、登山等の体験を充実させ、生徒の困難に負けない心を育むとともに、安全に配慮し、心に残る体験的活動の充実を図っている。



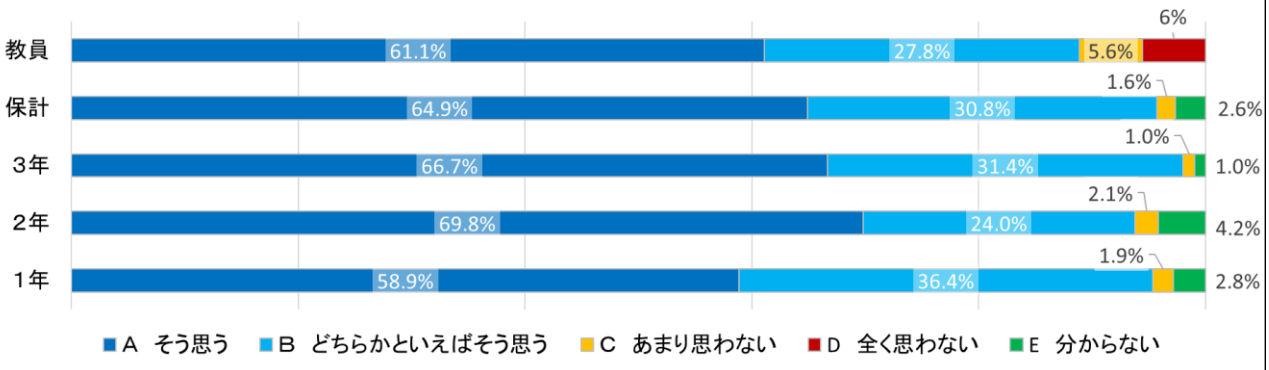
【困難に負けないしなやかな心を育む学校行事の充実(レジリエンスの向上)②】
学校は、いばら祭・音楽コンクールにおいて、多様な表現活動を生徒が相互に認め合い、学び合う取組を充実させ、しなやかな心を育む教育を推進している。



【困難に負けないしなやかな心を育む学校行事の充実(レジリエンスの向上)③】
学校は、Brithish Hills英語研修等を通して、多様な文化に向き合い、関わり、様々な課題を乗り越える力を育む教育を推進している。



【困難に負けないしなやかな心を育む学校行事の充実(レジリエンスの向上)④】
学校は、「グループワーク」や「学級運営委員会」等を通して、生徒が共に様々な課題を乗り越えるよりよい関係づくりの実現を推進している。



【次年度に向けて】

□ グループワークについて、運営の仕方についてのレクチャーや意義の共有に課題がある。教員への十分な説明と効果の検証を進める。

□ グループワークと特別活動の関連性を明らかにし、教育課程としての位置付けを明確にする。

【学校評議員及び関係者評価委員より】

○ レジリエンスはとても大事。学校行事だけでなく、幅広くレジリエンスを高めるマネジメントを進めてほしい。

5 「自主の名門」を意識した生徒の主体的・自治的な活動の推進

評価

【主な実践】

○ タブレットを十分に活用した生徒会活動の充実

・生徒総会を、タブレットを用いてオンラインで主体的に実施した。資料等を PDF 資料にし、チームス上で共有するなど、ICT を活用したコミュニケーションが盛んに行われた。

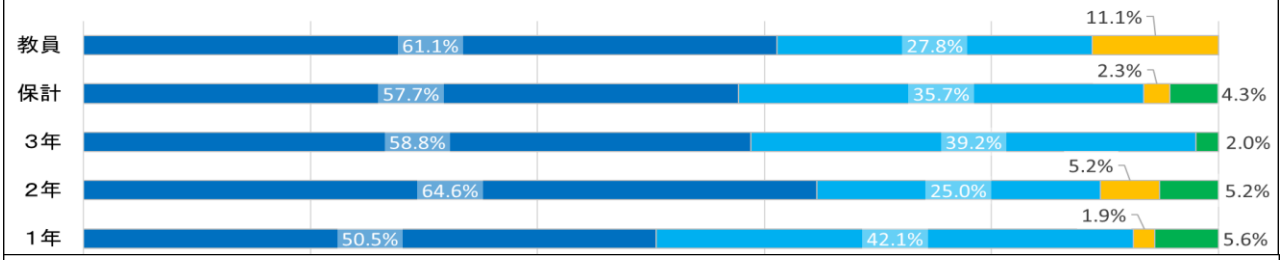
・生徒会から、アプリを活用して Web ページを制作し、生徒会活動を広く広報する活動が提案され、実践された。

○ 各種委員会の主体的活動による学校行事の運営

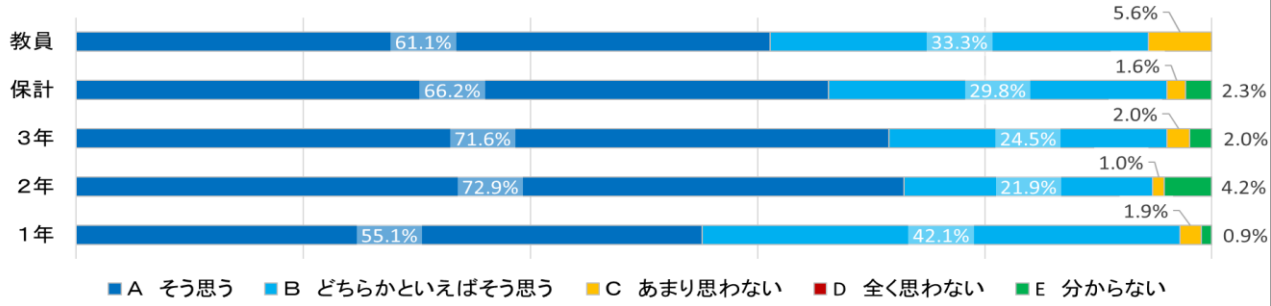
・体育委員会における、競技及びルールを設定して行う主体的運営

・いばら祭実行委員会、音楽コンクール実行委員会における、歴史と伝統、新たな価値の総合を担う主体的運営。「自主の名門」としての意識の涵養

【「自主の名門」を意識した生徒の自主的・自治的な活動の推進①】
学校は、生徒会、学年生徒会、生徒会常任委員会、学級運営委員会などにおいて、「自主の名門」を意識した自主的・自治的な活動を推進している。



【「自主の名門」を意識した生徒の自主的・自治的な活動の推進②】
学校は、附中スポーツフェスティバル、いばら祭、音楽コンクール等の学校行事の運営において、「自主の名門」を意識した自主的・自治的な活動を推進している。



【次年度に向けて】

□ 「自主の名門」として、生徒の自主性を育む教育ビジョンは、教員、保護者に概ね浸透していると考えられる。「自主」の姿をより発信する場を設定したり、保護者に向けた説明を充実させたりしながら理解を深めていく。

□ いばら祭、音楽コンクール共に校外の様々な方に発信する場としての認識を深める。

6　地球規模で思慮深く考える「グローバル市民科」の改善・充実

評価

【主な実践】

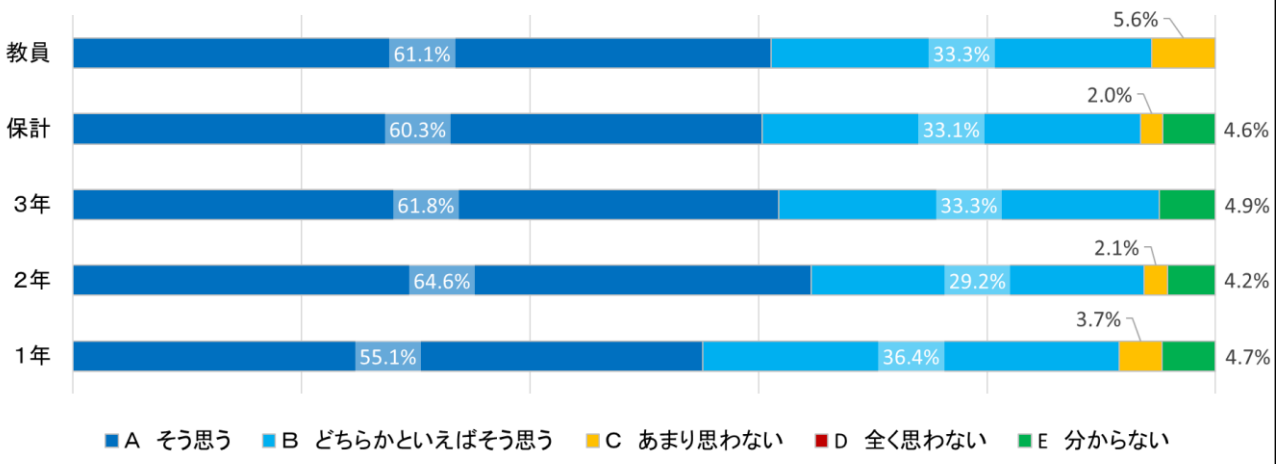
○　学年講座、選択講座における豊かな学びの実現

・防災に関する講座（第１学年）では、他学年や大学の教員と交流しながら、現代の防災の課題の実現する避難訓練を生徒自らが考案し、実施する実践が行われた。

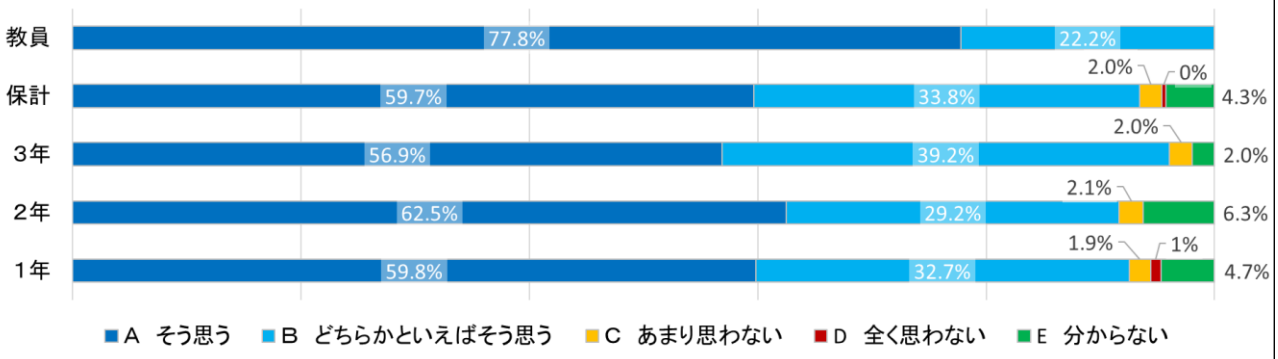
・選択講座では、各学年３つの講座を開設し、生徒の興味・関心においてテーマを選択し学習活動を展開した。

・生徒が自ら課題を設定し、計画を建てて情報を収集し、調査・分析の方法を選択し、自由にまとめ、表現できる時間としての土台を築いた。

【地球的規模で思慮深く考える「グローバル市民科」の改善・充実①】
学校は、「グローバル市民科」において、ゲストティーチャーを活用しながら、実社会との接点を重視したキャリア教育の推進に努めている。



【地球的規模で思慮深く考える「グローバル市民科」の改善・充実②】
学校は、附中スクールボランティアコーディネーターと連携し、附中スクールボランティアを活用するなど、多様な他者や視点とのつながりを生かした学習の充実を推進している。



【次年度に向けて】

□　各学年で育みたい資質・能力を明確化した上で展開される講座の解説を実現する。

□　講座の在り方（学年講座制か、選択講座制か、ゼミ制「縦割り」か）のビジョンを整理して全職員、生徒が目的意識を明確にして臨めるようにする。

□　各学年における講座の配置(バランス)を調整しカリキュラムにおける位置付けを明確にする。

□　校内にとどまらず、社会に向けた発信となる発表の場を設定する。

7　道徳性を高める心の教育の推進

評価

【主な実践】

○　「特別の教科　道徳」におけるガイダンスの充実

・全ての学級において「道徳ガイダンス」を実施し、道徳の意義、学び方を共有した。

○　学年における研修の充実

・木曜日１校時に「特別の教科　道徳」を設定し、学年会等において指導内容の検討を行った。

○　水戸市若手教員【２年次】に向けた授業公開

・水戸市総合教育研究所の御依頼を受け、本校において授業を公開した。公開に向け、学年及び全職員相互の授業研修（模範授業）、プレ授業の実施等を通して、道徳の授業の充実を図った。

○　「心のサポートセンター」の運営、スクールカウンセラーとの連携における生徒支援の充実

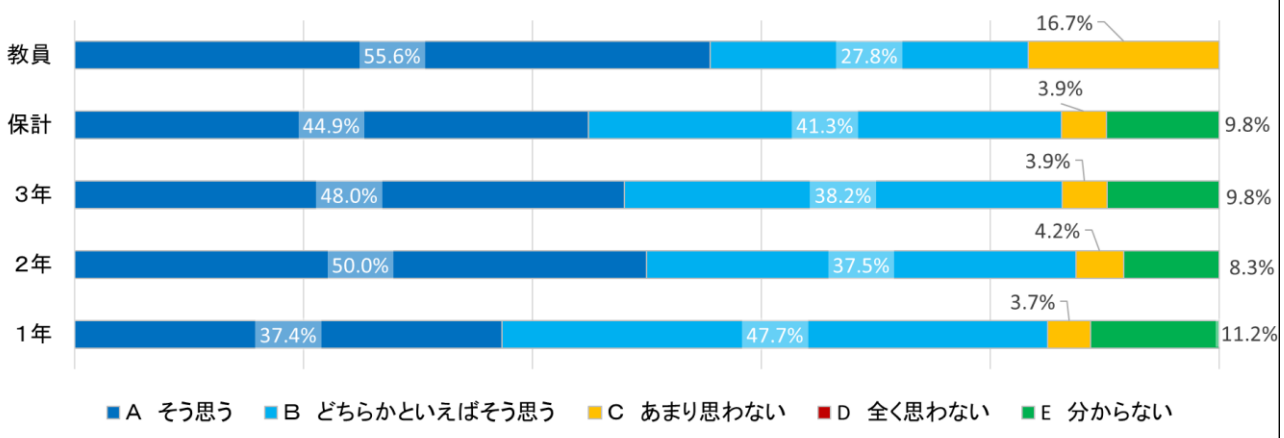
・サポートスタッフによる生徒支援（月、金）･･･大学人文社会学部臨床心理室院生実習

・サポートスタッフミーティングの開催（月１回）

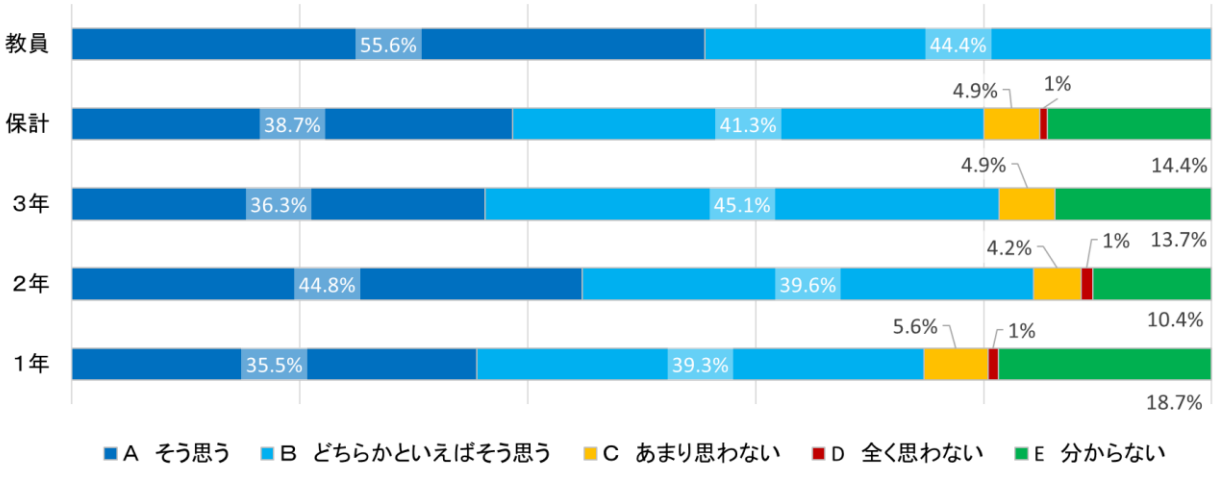
・スクールカウンセラーとの連携（木、金）

・カウンセラー日誌の共有（関係職員）

【道徳性を高める心の教育の推進①】
学校は、大学や、水戸市総合教育研究所等と連携を図りながら、多様な学びの場を活用した特別の教科道徳の授業実践を推進している。



【道徳性を高める心の教育の推進②】
学校は、大学院生による「心のサポートセンター」、スクールカウンセラー等との相談・支援体制の充実を図り、生徒の心に寄り添うとともに、道徳性を高める心の教育を推進している。



【次年度に向けて】

□ 教員と保護者との認識に差異が見られるため、この認識の差異の是正が課題である。「心のサポートセンター」の周知及び説明を十分に実施する。

□ 道徳の授業公開を通して、道徳的価値の涵養、道徳的実践力の育成の場面を発信することを通して、保護者の理解を深める。

□ 小中連携をより明確にし、生徒や保護者が抱える困難に寄り添う具体的手立ての実現を目指す（小中合同生徒指導研修会の確実な実施）。

【学校評議員及び関係者評価委員より】

○ 心の豊かさを姿として捉えられる機会は、様々なところにある。心の強さ、温かさ、美しさが見える姿を、これからも共有していきたい。

○ 不登校や、明らかには表出していなくても、心の問題を抱えている生徒に対しての教育がどの程度なされているかを知りたいと感じた。

○ 不登校率は３％というが、その他の心の問題を抱えている生徒の割合まで合わせると、クラスに数名はいると考えられるため、そのフォローも大切である。外部機関との連携を考えていく必要が益々求められる。